

# 発刊にあたって

—活性化度を測る指標「コミュニケーション量」—

武山 良三  
RYOZO TAKEYAMA

## ■求められる右肩上がりという発想からの脱却

富山県の人口減少が止まらない。平成30年12月1日付けと、10年前の平成20年10月1日付けのデータとを比較すると、舟橋村を除く14市町すべての行政区域で少なくなった。減少率は平均で7・1%、高岡市は5・1%、一番下がったのが朝日町で18・5%、次いで氷見市が13・5%<sup>(※1)</sup>であった。人口減少に比例するかのように中心市街地はシャッター街となり、高岡では、江戸時代以来の発展を支えて来た金屋町や山町筋といった歴史的街区が世帯減少に悩んでいる。人口ピラミッドは逆三角形型になり、この先10年で衰退はさらに加速することが予測されている。

\*1 出典：「富山県人口移動調査」県統計調査課

このような状況に対応し、行政を中心に関係者がさまざまな対策を講じているが、成果が実感される迄には至っていない。商店街から地場産業、まちづくりイベントまで対策が行われる度に「活性化、活性化」と呪文のように唱えられるが、果たして何を指して活性化できたと評価するのか目標が見えない。人がより多く集まる、売り上げが上がる、結局まちの経済規模が大きくなることだけを想定していると思えない。しかし、冒頭で述べたように都市の基盤を支える人口が減少の一途を辿っている今日、右肩上がりに増加することを目

標としても、それは現実を目を背けた幻想としか言いようがない。

筆者は平成20年より高岡錫物発祥の地・金屋町でまちづくりイベント「金屋町楽市 in さまのこ」を行ってきた。各年の参加人数は2日間で概ね2万2千人〜2万6千人の間で推移している。右肩上がりを目指すなら毎年せめて10%は増加させたいところだが、次の10年で来街者を3万5千人にできるかと言え、それは相当厳しい。人口が減っているのだから、多少増えても現状を維持するが関の山になるからだ。

右肩上がりの目標には対応力という課題も突きつけられる。イベントの目玉は日頃は見られない町屋内部の見学だが、現在でもピーク時には玄関に靴が置けない程混雑し、作品や町屋を落ち着いて見られない状況だ。これ以上見学者が増えると押し合いへし合いになり、作品や家具を破損する恐れもある。食事場所やお手洗いもバンク状態になり、見学する側は不満を感じ、主催者側は疲弊、二度とイベントなどしたくないという心境になってしまいうだろう。この構造は短期のイベントだけでなく、長期的なまちづくりについても同様なことが言える。人口が増えれば、それに合わせて小学校から高齢者施設まで社会サービスの実態など、際限なく投資や開発を進めて行かねばならなくなるからだ。

## ■活性化度を「コミュニケーション量」で測る

21世紀になり、日常生活がものに溢れ、取り立てて欲しいものがなくなってしまう今日、かつて満足感を得ていた要因は様変わりした。欲しいものを買いたい漁るのではなく、必要最低限のものだけで暮らす。簡素でエコロジカルで健

康的であることに満足を感じる傾向が現れている。「断捨離\*2」が流行語になったことは、その表れだろう。人数や金額など数の増加を目標とするのではなく、心が満足することを目標とすること、持続可能なまちづくりを目指していくことが求められている。

人口減少が深刻な富山県にあって、唯一舟橋村の人口が増えている。平成20年2,904人が平成30年には3,086人になった。しかも転入者の多くが子育て世代で、同村の15歳未満が占める年少人口割合は18・4%、県内トップである\*3。その要因としては、富山市近郊にあるという地理的優位性に加えて、駅に図書館を設置するなど心の満足を優先した事業を行ったことが要因として挙げられている。来館する子供達やお母さんに必ず声掛けをするなど、コミュニケーションを重視した取り組みが功を奏していると考えられる。

暮らしにおけるコミュニケーションの充実欲求は、都市部の子育て世代にも見て取れる。相模原市北端にある藤野地区に東京から子育て世代が移住し話題になっている。ここでは独自の地域通貨「萬よろづ」\*4が推進力になっている。地元の農家から野菜をいただく、例えばそれを2百萬と値付けする。移住者は、家の片付けを手伝ったり、インターネットの使い方を教えたりすることで2百萬分を返すという仕組みだ。そこには貨幣があるわけではなく、お互いのやりとりを記録した通帳があるだけだ。ポイントに通帳にはお互いの名前を記載するようにしていること。そのことによって、地域通貨という形式をとっているものの、自身はコミュニケーションツールとして機能している。数ではなく質を求めるこれからの社会。その質を担保するのがコミュニケーションだ。

\*2 やましたひでこ著『断捨離』(ダイヤモンド社)で紹介されたことば。

断捨離の基本は、モノを「断」ち、ガラクタを「捨」てれば、執着も「離」れていく、その本質は「出す」美学であると語られている。平成22年、ユーキャン新語・流行語大賞にノミネートされた。

\*3 平成27年度資料出典…とやま統計ワールド

\*4 藤野地域通貨よろづ屋

<https://fujinoyorozuajindo.com>

このような背景から楽市では、学生同士や学生と地域関係者とのコミュニケーションが促進されたかで活性化を測ることにした。学生はイベント開始当初はボランティアとして参加していたが、平成26年度からは芸術文化学部で新たに制度化された「プロジェクト授業\*5」を履修する形で参加した。その教育成果を測るため、コミュニケーションに関するアンケートを行ったところ、学生同士では80%以上、学生と地域関係者との間では40%以上の学生が「コミュニケーション」が深まった」と回答した\*6。自由記述では、「高岡についての知識が深まった」「自分が知らない世界を見せてもらった。自分の知らない人と交流するのが、こんなにも面白いのかと思った」などの記述があった。住民からは、「学生さんと話せて楽しかった」「なんもよーないと思っていた家から感心してもらえた」など活力を得たことや暮らしを再評価するコメントがあった。スマホにSNSといった最新のITを活用し、クールなコミュニケーションに長けた学生達だが、一方で五感を使ったホットな会話を求めていることがわかった。舟橋村や藤野地区、そして学生達の様子から「コミュニケーション量」をこれからの活性化指標に位置づけてはと考えるのである。

芸術文化学部が高岡市と結んだ連携協定の中で出版している『都萬麻Ⅱ』では、移住定住を大きなテーマとしているが、第2巻となる本巻では住みたいまちをつくる試みを集めている。それぞれの事例の中で、人々が何に魅力を感じて取り組んでいるか、その中でどのような質のコミュニケーションが行われているか。その事に思いを馳せていただくことで、現状を少しでも改善していく動きに繋がればと願うばかりだ。

\*5 一定の条件を満たしておれば通常の時間割外に学外で行っても授業と認められる制度。

\*6 「地域連携授業の課題と効果―『金屋町楽市inさまのこを事例に』―」芸術工学会No.77 P.28～29に詳細